

氏 名	タロダ ユウキ 多和田 有 希
学 位 の 種 類	博 士 （美 術）
学 位 記 番 号	博 美 第 337 号
学位授与年月日	平成23年 3 月 25 日
学位論文等題目	〈作品〉Local News 〈論文〉マジックリアリズムの今日的意味について
論文等審査委員	
（主査）	東京芸術大学 教 授 （美術学部） 伊 藤 俊 治
（論文第1副査）	〃 准教授 （ 〃 ） 鈴 木 理 策
（作品第1副査）	〃 〃 （ 〃 ） 小 谷 元 彦
（副査）	人間科学総合大学 教 授 植 島 啓 司

#### （論文内容の要旨）

本論文では、写真がいかに人間の精神的治癒と関連性を持つかという問いのもと、かねてから関心のあった写真療法について詳しく調査を進め、より深く探求するなかで浮かびあがってきた“マジックリアリズム”という概念について考察する。私は、このマジックリアリズムという概念がシュルレアリスムの分岐のひとつとして生まれ、ある種の普遍性を得るに至ったものであると考えている。ただし、シュルレアリスムが超現実の表現であったのに対し、マジックリアリズムは、マジック／リアリズムと分断できるように、超現実から現実へ回帰するようなベクトルを内包している。また、この概念には、人間の内界と外界を往還するプロセスとそのための方法が含まれており、それは、精神分析療法のプロセスの基底である「個性化過程」（ユングの文法に依る）と通じている。

本論では、まず、マジックリアリズムを精神的治癒のプロセスと定義し、その上でマジックリアリズムの作品における作者自身の治癒の過程（個性化過程）としての記録性と、同時に他者がその過程を追体験できるしくみについて言及した。また、具体的にその過程がいかに可能なものとなるかを、クレオール文化、ジャーナリズム、口承文化、影、女性性、神話、共同幻想、群衆心理などをキーワードに検証した結果、マジックリアリズムを定義する4つの要素が浮かびあがってきた。

#### マジックリアリズムの定義

- 項目1）作者の体内に複数の文化的パースペクティヴを持つ
- 項目2）「影」をモチーフとした個性化のプロセスを見せる作品である
- 項目3）ジャーナリズムの視点と魔術的視点を融合するしかけを持つ
- 項目4）イメージを言語に共同幻想を描いている

このような条件のもと、マジックリアリズムは共同体内部の感覚や野性の感覚を鮮やかに呼び起こし、空疎な集合的意識からの脱却を促すことによってアイデンティティをよみがえらせる。それゆえマジックリアリズムは、人々が心の中に共同幻想に混和されやすい「未開性」を抱えながら、地縁や血縁から切り離され孤立していくという現代日本の矛盾した状況に対し、一つのシステムとして必要とされる概念であるといえる。

そもそもマジックリアリズムは、非感情的なカメラ・アイを強調し、人形や間世界といった特殊なイメージをモチーフとした両大戦間におけるドイツのリアリズム、ノイエ・ザハリヒカイトの「特異な心

理状態の人間が見た世界をリアルに描き、それを観る人に体感的に伝える仕組みを持つ」という点を受け継ぎながら、メキシコで生まれた概念である。この2つが異なる点は、ノイエ・ザハリヒカイトが共同幻想や共同体を拒否し、頑に個に閉じこもることで得たいわば神経症的な魔術的視点であるのに対し、逆にマジックリアリズムが、共同幻想や共同体内部に入り込むことで得たいわばトランス的な変性意識状態での魔術的視点であるということだ。私の作品のモチーフもまた熱狂する群衆や増殖を続ける都市の姿を写し撮っているのだが、ノイエ・ザハリヒカイトの作品群と共通して現れるこの黙示録的な世界は、両大戦間で生きた彼らと同様に、私自身が日常的に感じている共同幻想への「接触恐怖」がきっかけとなっている。実際、こうしたノイエ・ザハリヒカイトの特徴である「接触恐怖」や、「黙示録的風景に対するノスタルジー」に見られる時代の危機の様相は、現代日本にも共通する部分があるように思われる。今日のサブカルチャーに見られる、私たちに繰り返し体験させてきた「この世の終わり」と「廃墟／焼け跡」という表れもまた、非常に巨大化しつつも抑圧されてきた日本人の「影」の叫びだったのではないだろうか。

その上で写真療法（フォトセラピー）の枠組みを利用することで人間の感情のダイナミズムを引き出し、作品に定着させる方法を探っていた私は、マジックリアリズムこそがこの「影」を召還し解き放つシステムを有すると確信するに至った。マジックリアリズムの作品と同じように、私自身もまた、自分が嫌悪する「影」のイメージを撮影し、類感呪術やアートセラピーに着想を得た触覚的手法でステティックな写真に「動き」－本来見ることでできないオーラや感情の動き－を取り入れ、目には見えないが私たちの日常を動かしている大きな「力」－共同幻想－を浮かびあがらせる手法を取っている。それは、生と死の狭間で宙づりになっている写真に揺さぶりや熱を与え、様々な都市を写した写真表面の裏に、欲望や暴力を含め抑圧されてきた人間本来の「野性の力」を可視化していく試みであり、今日におけるジャーナリズムと魔術の混交に他ならない。

#### （博士論文審査結果の要旨）

多和田有希の論文「マジックリアリズムの今日的意味について」では、マジックリアリズムという概念の考察を通じ、自身の作品の成り立ちについての再考が行われている。絵画や文学における具体的作例についての考察に基づき、女性性や共同幻想といった特徴に軸足を置いてマジックリアリズムを定義。さらにその言葉が生まれた1920年代後半のドイツの美術状況を検証し、ノイエ・ザハリヒカイトとマジックリアリズムの共通点および相違点を分析している。その上で自らの作品がいかにマジックリアリズム的であるかを論じているが、撮影時の思い入れを排除する形で選び取った写真の表面に物理的な傷を加えるその作業が、写真に潜在する魔術的力を再認識させること、加えて情報過多社会において行使される機会を失った人間の幻想力を喚起する意味がある点で説得力を持つ。以上の理由から学位授与に値すると考え合格とする。

#### （作品審査結果の要旨）

多和田有希の作品 多和田が扱うイメージのベースは、共同幻想を感じる集団や都市の風景が中心である。写真作品の多くはイメージという表皮をまとったオブジェクトである。その物質に対し、ニードルや消しゴムで執拗に傷を重ね、イメージを部分的に消去し、写真を印画紙である物質の白に戻す。この行為とは、すなわち個性を消し、共同幻想へ盲目的に傾倒する空白のメタファーでもあり、同時にハッチング行為の集積による形状・模様は、集団や都市に潜在する不気味で不可思議に感染する幻想や盲信状態を表すものである。この多和田の接触方法は、無造作に撮った写真を選び出す過程から行われ、最終的にダブルバインドで現実と幻想を作品に含有させる魔術的介入方法とも言えるだろう。

以上より「マジックリアリズム」という概念を考察した論文との整合性も非常に高く、学位授与に値するものとし合格とする。

(総合審査結果の要旨)

今回の論文では两大戦間のドイツを中心に大きなアート・ムーブメントとなった「新即物主義(ノイエ・ザッハリッヒカイト)」や「魔術的リアリズム」と呼ばれる非現実と現実を重合させようとする動向を自己の制作と照らしあわせながら、フロイトの精神分析や無意識、またコングの“個性化過程”といった心理学的な問題群と関連させて研究考察し、現代におけるマジックリアリズムの意味を再生しようとする試みである。論旨もオリジナリティーがあり、それぞれの章の構成もよく練られている。作品もすでに「タロー・ナス・ギャラリー」での個展やバーゼルのアートフェアへの参加など、国際的にも広く認知されていて、呪術的な力のこもったダイナミックな作品となっている。以上の観点から審査会委員のメンバーによる協議の結果、合格とする。